

第1回 動詞(二)

氏名()

次の文中の動詞にすべて傍線を引き、活用の種類(○行○段活用)と活用形を書け(略した形でいいよ)

- ① 八月十五日ばかりの月に出て 居て、かぐや姫といたく立き 給ふ。
 ダ行下二・連用 ワ行上一・連用 力行四段・連用 八行四段・終止
- ② 富士の峰かすかに見えて、上野・谷中の梢、またいつかはと心細し。
 ヤ行下二・連用
- ③ 老いては子に従へ。
 ヤ行上二・連用 八行四段・命令
- ④ なんとてかかる憂き目をば見るべき。
 ラ変・連体 マ行上一・終止
- ⑤ 「いづら(＝どこへ行った?)、猫は。こち率て 来。」
 ワ行上一・連用 力変・命令…文脈を考えよ
- ⑥ 世にふりぬることをも、おのずから(＝中には)聞きもらすあたり(＝人)もあれば、…
 ラ行上二・連用(「古くなる」の意) サ行四段・連体 ラ変・已然
- ⑦ 白露の色はひとつを(＝一つなのに) いかにして(＝どうして) 秋の木の葉をちぢに染むらむ
 マ行下二・終止
- 「木の葉を」とあるのだから、他動詞のはず。ということは、下二段。「染む(四段)」は「染マル」という意味の自動詞である。
 サ変・連用 ヤ行上一・未然 サ変・已然 力行四段・連用
- ⑧ 念じて 射んと すれども、外さまへ行きければ、…
 力行四段・連用
- ⑨ タベに寝ねて、朝におく。
 ナ行下二・連用 力行上二・終止「起く」である。文脈考えてごらん。「置く(四段)」のはずないでしょ。
- ⑩ 「観音火杭變成池はいかに」と札を書きて、大門の前に立つ。
 力行四段・連用 タ行下二・終止
- 文脈考えてごらん。札を「書」いたんだから、それを「立てた」んでしょ。すると、下二段のはず。